春行して興を寄す（李華）

宜陽 城下 草 萋々
澗水 東に 流れて 復 西に 向う
芳樹 人 無く 花 自ら 落つ
春山 一路 鳥 空しく 啼く

宜陽城下草萋萋　澗水東流復向西
芳樹無人花自落　春山一路鳥空啼

解説　安禄山の賊にとらえられて宜陽にいたころ、心に感じたものを書きつづったものであろう。

語釈　※春行＝春の行楽。※寄興＝心に感じたことを詩に托して述べることをいう。※宜陽城＝洛陽の西南、洛水のほとりにある。※萋萋＝草木がよく生い茂ること。※澗水＝谷川の水。※芳樹＝美しい花の咲く木。かぐわしい木。

通釈　宜陽の町の郊外には、春の草が盛んに生い茂っている。谷川の水は東に流れ、さらに西に向かって流れている。かぐわしく咲いた花も、それを見る人はなく、花はひとりでに散っていく。春の山路には鳥がむなしくさえずっている。